

メディア・コミュニケーション 2020 No.70 抜刷

集合的記憶の構築過程に関する ジャーナリズム論的考察

佐藤信吾

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所

集合的記憶の構築過程に関する ジャーナリズム論的考察

佐藤信吾



▶ 1 はじめに

2000年前後から、歴史学や社会学、文化人類学、心理学などで様々な論者が集合的記憶を対象とした研究を行う、「記憶ブーム」が到来したと言われている。オリックら(Olick et al. 2011: 1)は、福祉国家の拡大を通じて段階的な進歩を目指すという、戦後のモダニズム的言説が衰退するにつれて、国民国家が自らの正統性を強化する基礎として過去に頼るようになり、私たちの視線が集合的過去に向くようになったことを理由としている。また、成田龍一(2010: 19)は、アジア・太平洋戦争の戦争経験や戦争責任に関して、1970年前後までを「体験」の時代、90年前後までを「証言」の時代と区分したうえで、90年以降から現在までを「記憶」の時代としている¹。これは、戦争経験者が高齢になり、数も少なくなったことで、彼/彼女らの語りや歴史記録を通じて、大半の非戦争経験者たちが過去の出来事を想起する時代になったことを表している。前者のイデオロギー的要請と、後者の実践的要請が絡み合う形で、集合的記憶論は幅広い学問分野を横断する研究領域となった。

近年では、集合的記憶論とメディア研究を架橋するメディア記憶研究が盛んに行われている(Neiger et al. 2011: 1)。集合的記憶論では、記憶や想起といった現象を、個人的なものではなく、他者とともに行われる集合的なものと規定する。つまり、集合的記憶が想起されるためには、一定の過去の出来事とその「想起の枠組」が広い範囲に伝わっている必要がある。そこで、集合的記憶が構築され、様々なオーディエンスに共有される過程をメディアという視点から明らかにするのが、メディア記憶研究である。そもそも、「今日の(個人的)経験を想起する営みは、ドキュメンタリーや映画、文献、デジタル化された物語、ビデオ日記などを通じて完全にメディア化されている」(Joanne 2011: 42)と考えるならば、集合的記憶の構築過程を分析する上で、それぞれのメディアの差異や、オーディエンスとメディアとの関係に着目することは不可欠である。

このような問題意識のもと、様々なメディアを対象とした研究が蓄積されてきた。一例を挙げると、映画技術が、遠くにいる観客と過去の出来事との間の感情的なつながりを人工的に導くとした研究(Landsberg 2004: 15-18)や、オーラル・ヒストリー研究の手法を使うことで、テレビ番組で提示される歴史を通じて、国家観やジェンダー観、アイデンティティなどがオーディエンスに提示されることを検討した研究(Bell 2007: 5)、有名人が出演するファミリー・ヒストリー番組において、出演者が示す感情にオーディエンス

が「魅了され」ることで、感情は歴史を歪めるものではなく、むしろ感情こそが歴史の理解を促進し、過去と現在のつながりを示していると理解していくことを明らかにした研究 (Kramer 2011: 443) などが挙げられる。これらの研究は、メディアの形態や性質の違いに着目することで、集合的記憶の構築過程や提示のされ方、オーディエンスへの影響などを検討しており、まさにメディアに着目した集合的記憶論である。インターネットなど新しいメディアが次々に誕生する中で、その研究価値は今後も維持されていくと考えられる。

このように、近年では多くのメディア記憶研究が蓄積されてきた。しかし、「ジャーナリズムが明白に記憶の作用の前提条件となってきた現在でさえ、記憶研究においてジャーナリズムに言及されることは滅多にない」(Zelizer 2014: 45) という指摘からも分かるように、ジャーナリズムは集合的記憶論の主要な分析対象とは考えられてこなかった。ゼリザー (ibid.: 33) は、その原因を「記憶研究がジャーナリズム以外の記憶の仲介者 (agent) に着目し続けてきたこと、そしてジャーナリズム論がジャーナリズムの現在 (present) を記録する役割ばかりを強調し、過去 (past) を記録する役割を軽視してきた」ことに求めている。結果として、記憶研究に「深い穴」が生まれてしまった。

この提言に前後して、ジャーナリズムと集合的記憶の関係を論じた研究がなされ始めた。ジャーナリズム論を扱った学会や雑誌で、「集合的記憶」を論文のキーワードとする研究が増え、英米語圏ではジャーナリズムと集合的記憶を扱った書籍も徐々に出版されはじめている。それらの研究をレビューしたテネンボイムとネイガーは、「(1) 記念日報道のような実践を通して、ジャーナリストが直接過去に関与すること、(2) 現在の出来事を報道する際にジャーナリストが過去を様々な方法で利用すること、(3) 記憶とジャーナリズムの関係の今後の方向性、(4) ジャーナリズム自体の記憶と、ジャーナリストが自らのアイデンティティ、境界、および権限を確立するために記憶を利用すること」(Tenenboim-Weinblatt & Neiger 2019: 420-21) の四つの問題への関心を、現代の研究領域と考えている。ただし、テネンボイムらが、アルヴァックスの集合的記憶論を中心に議論を展開している (ibid.: 421) ことから分かるように、ジャーナリズム論においてアルヴァックス以後の集合的記憶論の発展が、適切に受容されているとはいえない。

そこで、本稿ではゼリザーなどのジャーナリズム論における集合的記憶の受容の先行研究を検討したうえで、アルヴァックス以後の集合的記憶論の発展をジャーナリズム論の観点から考察することを通じて、ジャーナリズム論と集合的記憶論を架橋していく。

▶ 2 ジャーナリズム論における集合的記憶論の展開

2-1 ジャーナリズム論における集合的記憶の位置づけ

テネンボイムらの分類のうち、(1) と (2) については、従来のジャーナリズム論で論じられてきた内容と関連している。古くはアンダーソンが、「想像の共同体」の構築過程における新聞 (マス・メディア) の役割を重視した (Anderson 1983=2007: 61-62) ことから分かるように、国民が一定のイメージを共有するためには、マス・メディアによる情報の共有が不可欠だと考えられてきた。またバーハーストとムッツ (Barhurst & Mutz 1997: 27) は 20 年以上前に、ニュース記事がより長く、より分析的になってきたことで、「現在よりも時間の枠組みに力点を置く」内容になってきたと指摘した。ニュースの内容は現在起っている出来事であるものの、過去とつなげられることで、その出来事の重要性や報じる意味が説明される。これらの研究でも、ジャーナリズムが過去を参照することは指摘されてきたものの、とりわけ過去を用いることに自覚的になったのが、集合的記憶と関連づけた諸研究である。以下では、特にジャーナリズムと集合的記憶とを結びつけて

論じる先行研究を検討する。

ラングとラング (Lang & Lang 1990 : 35) は、出来事とニュースの関係を量的に分析する中で、個人的で色鮮やかな記憶と、メディアの中にある限り (mediated) 時間が経過しても重要性を失うことがない過去のイメージとに記憶を分類した。エディ (Edy 1999) は、式典ジャーナリズム (commemorative journalism) に着目し、現在の出来事を語るニュースの物語において、過去のアナロジーと過去のコンテキストが用いられることを示した。一方でシュドソン (Schudson 2014 : 95) は、編集上の重要性から過去を参照すること、ニュース・イベントを説明する手助けとなる過去の文脈を使用すること、人々が日常生活でどのように振舞うかを示すことの三つの必要性から、ジャーナリズムは記念の意志を欠いていたとしても、文化的記憶²を使用するとした。また、ベコヴィッツ (Berkowitz 2011 : 201) は「集合的記憶はニュースをおなじみのものにすることができ、ジャーナリストはニュース組織とニュース・オーディエンスの双方に共鳴するような方法でストーリーを伝えることができる」とした。さらにキッチ (Kitch 2005 : 184) は、アメリカの雑誌の分析を通じて、「ジャーナリズムや他のメディアで語られ (told)、語り直されることで (retold) 有名になった歴史の解釈は、ナショナルな過去と同様にアメリカ人の現在の記憶をますます形成していくだろう」と述べている。大石 (2005 : 207) は、ホロコーストの集合的記憶を分析し、マス・メディアによって伝えられる情報が「集合的な記憶を特定の集団や国家の中で生成し、さらにはそれを超えて拡大することを可能」にしたとする。これらの研究によって、「過去」を題材にしてジャーナリズムがニュースを生産していること、およびジャーナリズムによって生産されたニュースが集合的記憶を意味づけていることが明らかになってきた。このダイナミズムは、集合的記憶論の内部にとどまっていただけでは見えてこなかった視点であり、ジャーナリズム論による成果と考えられる³。そのうえで、集合的記憶論を精緻に検討し、ジャーナリズム論へと展開したのが、次節で論じるゼリザーである。

2-2 「解釈共同体」とジャーナリズム論への貢献

先述のように、集合的記憶論とジャーナリズム論を理論的に考察し、相互に交流させた研究が少ない状況を指して、ゼリザーは記憶研究に「深い穴」が生まれてしまったと批判している。彼女は、テネンボイムらの分類 (p.44) のうち (4) の議論を特に重視した。

ゼリザーはジャーナリズム論において、集合的記憶の理論を踏まえた最初の研究者といえる。1992年の段階で、彼女はジャーナリズムがケネディ大統領の暗殺を即座にかつ大量に報道することで、アメリカにおける集合的記憶の中へと埋め込んだことを指摘 (Zelizer 1992 : 104) した。同書で指摘されている、ジャーナリズムの「解釈共同体」の概念は、アルヴァックスの集合的記憶論と親和性が高い議論になっている。

アルヴァックスが提唱した集合的記憶は、記憶を集団の視点かつ現在の視点から理解する議論である (Halbwachs 1950=1989 : 88-94)。私たちは「そのときどきに集団が用意している『記憶の枠組』を用いて過去を想起する」(浜 2007 : 4) のであり、「記憶の枠組」は集団によって異なるため、集団の外部では通用しない⁴。加えて、記憶の枠組に従って現在の視点から選択的に再構成された過去が想起されるため、アルヴァックスの集合的記憶論は「現在主義」(Cosser 1992:25) と呼ばれる。この集団をジャーナリズム組織と考えることで、ゼリザーはジャーナリズム論の発展を試みた。

「解釈共同体」は、もともと文化人類学などで用いられてきた概念である。ジャーナリズムの解釈共同体は、「ジャーナリズムの教科書、記者教育、資格取得の過程といった、ジャーナリズムの専門性の観点から公式化された行動規範以外のチャンネルを通じて知識を相互に共有しあうこと」(Zelizer 1992 : 9) によって構成される。記者教育などで明文

化された行動規範を習得するだけでなく、ジャーナリストは組織内での暗黙の了解や、情報源との私的な交流、上下関係といった明文化されていない集団の規範によって、社会的出来事の解釈枠組を構築していく⁵。この了解は、解釈共同体内部の集合的記憶によって作られる。ゼリザー (Zelizer 2014: 41) は、アルヴァックスの「集合的記憶はある一定の社会的枠組を必要と」するという主張を受けて、ジャーナリストが自らの仕事の中で用いる様々な要素によって、ある種の分類⁶が構築されていることを、ジャーナリズム実践に対する批判的研究は強調してきたことを示した。この分類の代表的なものとして「客観報道主義」を挙げることができる。新聞記事は客観的に書かれなければならないという信念のもと、記事の中から「『私』という主体を消し去る」(大石 2005: 64) 作業が日々行われている。新聞記事は無署名で書かれるべきであるという明文化された規範はなく、またどのような記事が客観的かという明確な基準も、基本的には示されない。その中で記者は、取材や編集といった体験や他の記者からの評価を通じて、どういった記事が客観的かを学び取っていく。その時に参照されるのが解釈共同体の中で受け継がれてきた集合的記憶(慣習・習慣など)である。

ゼリザーは解釈共同体の概念を用いることで、集合的記憶論の中にジャーナリズムを位置づけることに成功した。従来のジャーナリズム論では、ジャーナリストや組織に対する外的圧力(法律、経営体制、政治家の介入など)が重視されてきたが、解釈共同体の議論は組織内の関係性がニュース生産を規定しているメカニズムを描き出している⁷。

2-3 集合的記憶論のジャーナリズム論における可能性

解釈共同体の議論を媒介として、ゼリザーはアルヴァックスの集合的記憶論の中にジャーナリズムを位置づけた。アルヴァックスが、集合的記憶の枠組を共有する対象を、家族や地域社会、学校など、比較的小規模で相互に直接コミュニケーションを取り合う集団と想定したため、ゼリザーの解釈共同体の議論もジャーナリズム組織内部という集団を対象とすることとなった。しかし、モーリス＝スズキ (Morris-Suzuki 2005=[2004] 2014: 296) が、現代を「過去が、まるで抑圧された記憶のようによみがえってきては現在の政治に影を落とす」時代と評価しているように、集合的記憶は政治や国家、アイデンティティなどと深くかかわっている。それに対応する形で、集合的記憶論もアルヴァックスが想定した集団の枠組を超えた国家的記憶を理解するために、これまで様々な理論を提出してきた。また、2-1で示したように、ジャーナリズムは国家的記憶の構築過程に深く関与しており、これを無視したまま国家的記憶を語るのは難しい。そこで本稿では、国家的記憶の構築過程におけるジャーナリズムの機能を論じるために、アルヴァックス以後の集合的記憶論の思想家であるノラとアスマンの議論を参照する。

▶ 3 国家的記憶の構築に携わるジャーナリズムの実践と機能

3-1 ニュース・ソースとしての「記憶の場」

ここまで述べてきたように、ジャーナリズム論において集合的記憶に言及する場合、主としてアルヴァックスの議論が参照されてきた。アルヴァックスは、私たちの記憶が依拠するのは「学んだ歴史ではなく、体験した歴史」(Halbwachs 1950=1989: 56) であるとして、ヴィクトル・ユーゴーの国民葬の体験を語っている。この「体験した歴史」を拡張し、過去を保存・顕彰する「場」と人々の相互作用に着目することで、集合的記憶論を発展させたのがノラである。意図的に記録を残し、記念日を維持し、祝祭を組織する必要があるという意識が広がる現代において、「記憶の場」が各地に現れている (Nora 1984=2002: 37)。大きな物語としての歴史(国民史)が崩壊し、歴史が分散化する中で、

「記憶の場」はナショナルな過去の再構成を可能にする。「記憶の場」には、過去のイメージが凝縮され、象徴的に体现されているので、各集団はこれらの象徴を介して自らのアイデンティティを創造する（神谷 2016：80）。そして、ノラの関心は「過去の事件それ自体ではなく、むしろ、集合的記憶の中でその事件のイメージがどのように形成され、変容してきたのか」（安川 2008：290）に向けられることとなる。「記憶の場」は過去の出来事がありのままに保存されている場ではなく、現在の視点から一定のストーリーの中に意味づけられて披露されている場として捉える必要がある。ノラは、博物館などの建物だけでなく、記念碑、遺跡、祝日、教科書、国家や国旗をも「記憶の場」と捉えている。しかし、彼がジャーナリズムだけでなく、新聞や雑誌、放送などに主眼を置いて考察していない点は、記憶研究におけるジャーナリズムの軽視を示すとされる（Olick 2014：21）。

宗教社会学を中心とした「記憶の場」の研究では、「記憶の場」を「戦没者を追悼あるいは記念する何らかの構造物と、そうした構造物を中心として執り行われる追悼式や慰霊祭などの、宗教的あるいは世俗的な儀礼を可能にする場」（粟津 2017：19）と定義し、「記憶の場」がどのように構築され、地域社会との関係の中で意味づけられ、祭礼を通じてどのような記憶の想起に貢献しているかが中心的な論点となってきた。これを、観光学の観点から捉えたダークツーリズム論、文化人類学などのフィールドワークに基づく研究、マイノリティの「記憶の場」に着目した研究など、様々な領域で盛んな議論が行われている。

そして、ジャーナリズム論の視点から「記憶の場」を捉え直すと、「記憶の場」はニュース・ソースとして機能すると考えられる。「解釈を行い、矛盾を最小限に抑え、事実を検証し、報道に含まれる情報を裏づける」といった言説実践がジャーナリズムの仕事には求められている（Zelizer 2014：41）が、過去の出来事の場合、当事者が亡くなっていたり、証拠となる資料が散逸していたりするため、現在の出来事以上に取材が難しいケースが少なくない。博物館などの「記憶の場」には、証言や史料が集められ、過去の出来事が一定のストーリーに位置づけて披露されているため、ニュース・ソースとして価値が高くなる。ニュース・バリューは単純化のしやすさや映像的魅力などによって向上する（大石 2005：88）ことから、「記憶の場」において分かりやすく解説され、見栄えよく脚色された集合的記憶は、ジャーナリズムによって解釈されたうえでメディア・コンテンツとして表現され、多くのオーディエンスに共有される国家的記憶となると考えられる。

マス・メディアは世界中に「ニュース網」を張り巡らせており、ジャーナリストはその「網」の中で、「自ら目撃した出来事や、難なく入手した情報」（Tuchman 1978=1991：32）をニュースとして取り上げる。一方で「網」から漏れて、ジャーナリストから見えない出来事は報道されない（ibid.：34）。この議論からも分かるように、ジャーナリズム組織がどのように記者や支局を配置し、どの地域に予算を重点的に振り分けるかといった制度面の差異によって、ニュース・バリューは異なってくる。裏を返すと、「ニュース網」の中に組み込まれたニュース・ソースは、ジャーナリストによる報道の「ルーティーン化」を通じて、繰り返し報道されることとなる。つまり、ジャーナリストがアクセスしやすいところに、「事実」や「出来事」を補完する資料や素材が集まっていると、それ自体のニュース・バリューが高くなる。とりわけ、博物館や資料館は「客観的」な情報を簡単に入手できる施設であり、ジャーナリストにとって価値のある場所であるため、集合的記憶の参照点の役割を持つ。

「記憶の場」にアクセスするのは、マス・メディア組織に所属するジャーナリストに限られるわけではない。アルヴァックスは、ロンドンを一人で散歩しているときに、ふとディケンズの小説を思い起こす例を挙げながら、「われわれがひとりだけで経験した出来事も、われわれはそれを集団の観点から想起する」（浜 2000：6）としている。つまり、

フリーのライターやドキュメンタリー映画の監督など、ジャーナリズム組織に属していないジャーナリストであっても、彼らはジャーナリズム組織で共有される集合的記憶を参照しながら、ジャーナリズム実践を行っているとして解釈する方が自然である。ジャーナリズム実践と「記憶の場」(集合的記憶)を結びつけるうえで、ジャーナリズム組織だけに目を向けるならば、集合的記憶論が持っていた理論的豊かさを半減させてしまう可能性すらあるといえる。

そして、ジャーナリストの目に留まるために、「記憶の場」もメディア化 (mediatization) することが要求される。メディア化とはメディア・ロジックが様々な実社会の実践にどのような影響を与えるかを考察する概念であり、とくに政治のメディア化が議論されている。エッサーとシュトロームバックは、政治家や政治機構がメディア・ロジックによって導かれる形を、政治のメディア化の最終局面と定義した⁸ (Esser & Strömbäck 2014: 8)。ここでのメディア・ロジックは、「専門性」、「商業主義」、「メディア技術」の三つの側面から構成される (ibid.: 19)。ジャーナリズムとの関係では、「専門性」が特に注目される。エッサーらが定める「専門性」とは、これまで述べてきたニュース・バリューへの志向性と外部からの影響力や管理に抵抗する自律性の確保を目指す (ibid.: 17) といった、ジャーナリズム論で盛んに議論されてきた内容である。重要なのは、それまで政治ロジックで動いてきた政治家や政治機構が、メディア・ロジックによって動くようになる点である。「記憶の場」もメディア・ロジックに沿うように展示や見せ方を工夫するだけでなく、ジャーナリストが理解しやすく、記事にしやすい想起の枠組を優先的に採用することで、「ニュース網」の中に組み込まれ、報道されることを目指していく。「記憶の場」は、単なる集合的記憶が蓄積する場である以上に、ジャーナリズムのまなざしを吸収して変化し、メディア化していく。

3-2 「記憶の場」としてのメディア・イベント

前述のように、ノラは博物館や記念碑といった物質的な対象のみを「記憶の場」と定義したわけではない。記念日や記念式典は、国家的記憶を構築し、国民のアイデンティティを形成するうえで欠かせない存在である。そして、マス・メディアやソーシャル・メディアが発達した現代社会において、記念日や記念式典などはメディアを通じて全国民 (あるいは全世界の人々) に届けられるメディア・イベントとなっている。先述の式典ジャーナリズムなども、メディア・イベント論との関係で考案された議論である。本節では、メディア・イベントを「記憶の場」として捉え直すことを通じて、ジャーナリズムによるメディア・イベントへの参画を考察していく。

テレビが「通常の番組スケジュールを中止して」行うセレモニー的イベントを、ダヤンとカツ (Dayan & Katz 1992=1996: 24-25) は「メディア・イベント」と名づけた。メディア・イベントは、事前に計画され、放送主体 (テレビ) が恭しい態度をとるイベントであり、広範な視聴者の心を揺さぶることとなる。デジタルメディア時代と呼ばれる現代では、「オーディエンスからの注目を集めるための競争が激化し、また、正当性 (象徴的価値) や [経営上の] 生き残り (経済的価値) をめぐるメディア制度間の闘争がますます可視化しつつある」ため、「特定のメディア生産のタイプが『イベント』を生み出すことにますます依存するようになっていく」 (Couldry 2012=2018: 129) とされる。現代社会においては、テレビ以外の様々なメディアも、多種多様なメディア・イベントを創出し、そのイベントに多くのオーディエンスが参画している。メディア・イベントにおいて重要なのは、広範な視聴者に、同時にセレモニー的イベントが伝達されること、そして理解しやすいストーリーを視聴者が望んだ形で提示することである。メディア・イベントには「魔術的効力」 (Dayan & Katz 1992=1996: 201-251) があり、支配的なパラダイムを

補強するだけでなく、その他の記憶の痕跡や想起の可能性を不可視化する、記憶の忘却機能も有している。

ジャーナリストは、メディア・イベントの外部に位置するのではない。自らもメディア・イベントの熱狂の中に巻き込まれながら、参加者として登場人物の一挙手一投足に注目してストーリーを伝達する。そして、「ストーリーの形態が固まると、それがもろもろの後続の行動を、関係づけたり評価したりする基準」(ibid.:73)として、メディア・イベントを一貫したストーリーの下で報道する。ここでジャーナリストは、広範な視聴者を楽しませるだけでなく、イベントの意味を理解させるために、イベント以前から共有されてきた集合的記憶を参照することとなる。特に大規模なメディア・イベントの場合、集合的記憶は国家的記憶と読み替えることができる。モーリス＝スズキ (Morris-Suzuki 2005=[2004]2014:58) は歴史小説が、「すぐ前の世代が経験し、今もまだ一部の人の記憶に残る歴史の大変動を書くことによって、読み手が自己を重ねられるような人物の心や性格を通して社会の変容する姿を表現でき、そうすることで過去と現在のあいだの、そして国と個人のあいだの、強い連続性の感覚をうみだせる」と述べているが、メディア・イベントにおいてもジャーナリストは「すぐ前の世代」の経験を記憶として表現することを通じて、国家の連続性や個人と国家のつながりを強めていく。

メディア・イベントの登場人物は、主役である国家元首やスポーツ選手だけに限られない。テレビであれば実況や解説、ソーシャル・メディアのユーザーなどが熱狂を生み出すことによって、メディア・イベントは「成功」する。彼／彼女らは専門的なジャーナリストとは異なるものの、目の前のイベントを解釈し、国家的記憶を参照したうえで情報を発信する主体であるとみなすことができる。ジャーナリストを含めたこれらの主体は、異なる「場」や環境から同じメディア・イベントを眼差しており、情報を発信するプラットフォームも異なる。そのため、参照する国家的記憶の枠組みも同じものとはならない。情報発信者が多様化する現代社会において、メディア・イベント時の想起の実践も多様化していると解釈することができるが、その中でも大多数の人々が同様の記憶を想起しているとすれば、その記憶は国家的記憶として強固な基盤を持っているといえる。

さらに、メディア・イベントと集合的記憶の関係を考える上で、国民国家の枠組みを超えたグローバルな記憶への言及も忘れてはならない。ヘップとクドリーは、ダヤーンとカツのメディア・イベント論の有用性を認めながらも、メディア文化がグローバル化する現代において、メディア・イベントの理解を更新する必要性を訴えている (Hepp & Couldry 2009:1)。ここでは、アスマンのグローバルな記憶の議論が参考になる。アスマンはホロコーストの記憶がグローバルな象徴の地位を得ているとしたうえで、それが各国の様々な他の歴史的トラウマを枠づけるパラダイムとなっていることに着目する (Assmann 2010:114)。ホロコーストの記憶は、映画や書籍、イベントを通じて普遍的な象徴となり、「あらゆる種類の道徳的悪の現れに容易に関連付けられ、あらゆる痛み、破壊、トラウマ、災害に常に適用できる自由に浮遊するシニフィアン (a free-floating signifier) となって」いる。それぞれの集団は、このグローバルな記憶を集団で共有する文脈に落とし込んで活用し、その結果ホロコーストはグローバルな記憶ではなく、各集団の記憶となる。想起の実践がナショナルなものにとどまっている場合、メディア・イベント自体がグローバルに展開されたとしても、各国で報道される内容はナショナルな文脈に付置され、国家的記憶を補強する役割を果たすと考えることができる。すなわち、グローバルなメディア・イベントの場合でも、想起される集合的記憶を国家的記憶と対応させて考える必要がある⁹。

ここまで、ジャーナリズムが「記憶の場」と相互作用することで、「記憶の場」で構築される集合的記憶が国家的記憶へと転換される過程を理論的に考察してきた。博物館や資

料館などの「記憶の場」を、単なる集合的記憶の蓄積する「場」と見るのではなく、ジャーナリズムと繋がりながら、特定の想起の枠組を国家的記憶へと押し上げていく「場」として見ることで、「記憶の場」の研究に新しい視点を導入することができる。さらに、メディア・イベントも「記憶の場」の議論に取り込むことが可能である。ジャーナリストはメディア・イベントの参加者であると同時に、想起の枠組を外部化する役割を担っている。このように「記憶の場」とジャーナリズムの相互作用を分析することは、国家的記憶の構築過程の一端を明らかにするうえで、示唆に富んでいる。しかし、ジャーナリズムは国家的記憶の維持にのみ貢献するわけではない。次節では、アスマンの議論を参照しながら、ジャーナリズムによる「記憶の発掘」の機能を中心に考察する。

3-3 蓄積的記憶・機能的記憶・ジャーナリズム

前節までで、ノラの「記憶の場」の議論を参照しながら、ジャーナリズムが国家的記憶を構築する過程の一端を明らかにしてきた。本節では、ジャーナリズムがこれまで知られていなかった想起の枠組を発掘する機能に焦点を当てる。

集合的記憶論を発展させた重要な思想家として、アスマンを挙げるができる。彼女は集合的記憶を「コミュニケーション記憶」と「文化的記憶」に分類した。コミュニケーション記憶は、「個人の有機的な記憶を基盤とし、具体的な生活連関におけるコミュニケーションと相互行為を通じて自然発生的に形成」される記憶であり、「その担い手が交代すれば、その内容もまた移ろう」とされる（安川 2008：287-288）。アルヴァックスが想定していた集合的記憶は、コミュニケーション記憶に該当する。一方で、文化的記憶は規範的なテキストによって支えられ、時代をこえるものとされる（Assmann 1999=2007：26）。アルヴァックスは、何世代にもわたって集団を超えて維持される過去を「歴史」と捉え、集合的記憶と対立させた。しかしアスマンは、国家的記憶や伝統、文化、教養といった何世代にもわたって広範に共有される過去の解釈枠組を、文化的記憶と定義して集合的記憶論に組み込んだと評価できる。

さらに、アスマンは文化的記憶を「蓄積的記憶」と「機能的記憶」に分けている（ibid.：162-167）。蓄積的記憶とは、ストーリーに埋め込まれたり、意味づけがなされたりしていない無定形の塊である。現在との生きた連関を失った過去の遺物や残滓は、蓄積的記憶としてアーカイヴ化されるとアスマンは考えている。その中で、現在と結びつけられ、特定の意味づけや価値づけがなされたものが機能的記憶である。機能的記憶は特定の集団と結びつき、ある部分を想起するとともに、ある部分を忘却させるという選択的性質を伴う。そして、機能的記憶となったものは、「一つの考え方の枠組として社会的規制力を発揮」し、さらに「自然的所与」であると考えられることで、人為的なものであることが否定される傾向にある（石田 2000：273）。つまり、社会的規制力を持った機能的記憶は、伝統、慣習、文化などと呼ばれ、変更不可能で古来より一貫した枠組であると理解される。

機能的記憶は、蓄積的記憶の一部が切り取られ、意味づけがなされることで生成される。ただし、機能的記憶は永続的に同じ意味づけのまま維持されるわけではない。機能的記憶が人々の間から忘却されることはあるが、それは記憶の消失を意味するのではなく、蓄積的記憶への回帰を意味するのである。蓄積的記憶の中から選択的に意味づけがなされ、共有されたものが機能的記憶であり、機能的記憶は常に蓄積的記憶のアーカイヴの中に戻る可能性を秘めている。

アスマンはさらに、両記憶の機能について論じている（Assmann 1999=2007：168-173）。機能的記憶は、集団の支配者に正当性を付与する「正当化」、正当性に対抗する基盤を提供する「非正当化」、そして集団のアイデンティティに輪郭を与える「区別」の三つの機能を持っている。国民国家に当てはめれば、自らの支配が正しいものであることを

示すために、機能的記憶を参照するが、支配に対抗する諸集団は別の機能的記憶を保持しながら、その時点で支配体制を非正当なものとして定義する。革命などによって支配体制が逆転すると、それまで「非正当化」の機能を有していた記憶は、新たな支配体制を「正当化」する記憶へと転換される。また、国民国家の成員と非成員を「区別」するためにも機能的記憶は利用される。

一方で、蓄積的記憶は「将来の機能的記憶の貯蔵庫」(ibid.: 170)となる。機能的記憶には特定の意味づけが行われており、その過程で数々の無視や忘却を伴う。それを矯正したり更新したりするためには、現在との結びつきが失われ、特定の意味づけもなされていない蓄積的記憶が不可欠である。アスマン(ibid.: 171)は、アーカイブ、美術館、図書館、研究機関などを具体的に挙げながら、蓄積的記憶や過去の痕跡が、現在の社会と直接的な結びつきを得ずに残される必要性を力説している。蓄積的記憶から発掘され、新たな意味づけがなされた機能的記憶は、それまでの機能的記憶を批判的に問い直す。蓄積的記憶がアーカイブ化されていない社会は、新たな記憶の可能性が失われていると言える。

アスマンを含め、集合的記憶を論じる際に、内閣などの行政組織、政党や国会議員、市民団体を中心とした政治組織、美術館や博物館などのミュージアムが機能的記憶の構築主体として積極的に分析されてきた。しかし本稿でたびたび言及しているように、ジャーナリズム組織やジャーナリストも集合的記憶の構築主体であり、上述の組織とは異なる意味づけを行いながら、機能的記憶を生産していると考えられる。

3-4 ジャーナリズムによる蓄積的記憶の機能的記憶への転換

蓄積的記憶と機能的記憶とを分割することで、「記憶の発掘」を機能的記憶の構築と読み替えることができる。ここでは、ジャーナリズムによる機能的記憶の構築過程を二つの側面から論じる。

第一に、実際に過去の出来事や記憶を報じるという点である。「記憶の場」を取材することで、ジャーナリズムは過去の出来事を繰り返し報道することとなる。先述のエディ(Edy 1999: 74)は、「記念日ジャーナリズム(anniversary journalism)」と呼称し、様々な記念日の周辺に報道が集中する結果、記憶の想起が活発になることを考察した。日本でも「八月ジャーナリズム」などと呼ばれるように、終戦記念日の周辺では戦争の記憶に関する報道が多発する。

先述の解釈共同体の議論からも分かるように、ジャーナリストは様々な外部の影響を受けながらニュースを生産する。その中には客観報道主義などの抽象的なものから、同僚やライバル記者、編集者などのアドバイスや批判といった具体的・属人的なものまで様々ある。とりわけ、「事実」の重視はジャーナリズムにおける基本姿勢として共有されている。現在進行形の出来事の場合は、証言者が多数存在し、「事実」の基礎となる証拠も数多く残されているため、多角的に「事実」に接近し、出来事の全体像を捉えることが可能となる。しかし、過去の出来事を報道する場合、証言を得たり、複数の史料に接したりすることが難しい場合が少なくない。特に、数十年以上が経過した出来事の場合、証言者の数も少なく、証拠も散逸してしまっている。そのため、珍しい個人的体験をインタビューで聞き取れたり、まったく新しい史料を発見したりできたとしても、多角的な裏づけが難しい場合には報道がされにくくなり、オーディエンスの目に触れることはない。言い換えると、事実性や客観報道など、ジャーナリズムで重視されている規範を満たすという枠組によって、蓄積的記憶が機能的記憶となるか否かが選択されることとなる。

第二に、現在の出来事を報じる場合に、過去の出来事や記憶が参照される点である。コンボイは、社会学者のポッチケの議論を参照しながら、「ジャーナリズムは、歴史を潜在的な知識の貯蔵庫として活用することで、公的な議論に多大な貢献を果たすことができ、

そうすることで、ジャーナリズムは自らを他のより即時的な情報の流れと区別することができる」(Conboy 2012: 3)と述べている。とりわけインターネットが発達し、誰でも簡単に情報を発信することができる現代においては、単なるストレート・ニュース以上に、現実の出来事を歴史的な文脈に位置づけ、一種のストーリーとして報じることで、ジャーナリズムはニュースの価値を上げていると解釈できる。

過去からの流れを受けて現在の出来事を物語る点は、ジャーナリズム論で繰り返し論じられてきた。ただし、機能的記憶の議論において重要なのは、現在のニュースの解釈枠組によって想起の枠組も規定される点である。それまで蓄積的記憶としてほとんど触れられてこなかった過去の出来事が、現在の出来事と結びつくことでニュース・バリューを持ち、機能的記憶となる場合、現在のニュースと関連づけられて想起される。

また、「思い出とはかなりの部分、現在から借用した所与の力を借りて過去が再構成されたものである。だがその一方では、以前の時代になされた別の再構成によって用意されて、過去が再構成されたものでもある」(Halbwachs 1950=1989: 70)と述べていることから分かるように、アルヴァックスは単純な「現在主義」による構築主義的アプローチではなく、想起を規定する現在の基盤が、過去によって規定されたものの積み重ねによっても存在すると考えている(金 2010: 27)。すなわち、ジャーナリズムによる現在の出来事に対する「過去との一貫性の提示」は、現在の出来事の意味づけを規定しているだけでなく、想起の枠組を構築し、過去の見方を画一化していると指摘できる。

ジャーナリズムは、歴史の第一発見者(記録者)とされる。たしかに、ジャーナリズムによって記録・報道されたものが、後世の人々が出来事を確認・想起するための材料となることは間違いない。ただしここまで見てきたように、ジャーナリスト自身も、蓄積的記憶を参照しながら、現実の出来事を意味づけ、機能的記憶を生成する主体であることも忘れてはならない。もちろん、アスマンが対抗的な機能的記憶(「非正当化」)に言及したように、必ずしも支配的な記憶にジャーナリストが迎合すると考える必要はない。

本節では、ジャーナリズムによる蓄積的記憶の機能的記憶への転換を、二つの視点から分析してきた。機能的記憶とは、蓄積的記憶から抽出されて、集団の理解の枠組みに従って意味づけられた記憶である。ジャーナリズムが「社会の支配的価値観、ないしは知識と密接に関連した」連想を行うこと(大石 2005: 120)と突き合わせても、ジャーナリズムによって機能的記憶が生成される場合、蓄積的記憶の持っていた豊かさや多様性を低減させるという認識が必要である。

▶ 4 結 論

本稿では、メディア記憶研究が盛んになる一方で、集合的記憶論とジャーナリズム論の橋渡しをした研究が少ないことに着目し、ジャーナリズム実践と集合的記憶の相互作用を理論的に明らかにしてきた。とりわけ国家的記憶は、新聞やテレビ番組、雑誌、映画などのマス・メディアによって意味づけられるものであり、それらメディア・コンテンツを生産するジャーナリズムの果たす役割は大きい。そこで、ジャーナリズムと集合的記憶に焦点を当てた先行研究を概観したうえで、集合的記憶論の発展をジャーナリズム論に導入することで、双方の研究領域に新しい視点を導入することができることを示した。

第2章では、集合的記憶をジャーナリズム論として扱った先行研究を概観した。テネンボイムらが示した四つの分類(p.44)のうち、(1)と(2)と関連した研究は、数多く蓄積されてきた。そこでは、式典ジャーナリズムを通じた集合的記憶の構築、集合的記憶を通じたオーディエンスとニュース組織の共鳴などが分析されてきた。しかし、ジャーナリズム論の中に集合的記憶の理論を導入することはほとんど試みられていないことも、同時

に指摘した。

この点を批判し、前述の分類の(4)を深めたのがゼリザーである。ゼリザーはアルヴァックスの集合的記憶論を受けて、解釈共同体の視点からジャーナリズム組織の内部で構築される集合的記憶に着目した。ジャーナリズムは外的圧力だけでなく、組織の内部で構築される規範や関係性にも影響されながらニュースを生産する。その内的影響力を決定する主要因の一つが、ジャーナリズム組織内部で共有される集合的記憶である。ゼリザーは、集合的記憶論をジャーナリズム論に導入する一つの方向性を示したが、集合的記憶論はアルヴァックス以後も発展を続けている。そこで、第2章の最後には、国家的記憶を分析する必要性と有効性の観点から、アルヴァックス以後の集合的記憶論に言及する意味を述べた。

第3章では、上記の問題意識に基づいて、ノラとアスマンの理論からジャーナリズムと集合的記憶の関係を捉え直すことを試みた。「記憶の場」はジャーナリズムにおけるニュース・ソースの機能を持つ。「ニュース網」に組み込まれ、ジャーナリストによって取材されることで、「記憶の場」で描かれる集合的記憶は国家的記憶へと変容する。加えて、博物館や資料館などの「記憶の場」は、自らがジャーナリストによって取材されることを求めて、メディア化されていく点も重要である。そして、「記憶の場」にはメディア・イベントを含めることができる。ジャーナリストは、メディア・イベントの参加者であると同時に、その想起の枠組を外部化する主体である。メディア・イベントも「記憶の場」であることから、ジャーナリズムが生産するメディア・コンテンツを経由して、国家的記憶を生成する「場」と考える必要がある。

さらに、本稿ではアスマンの集合的記憶論を参照することで、ジャーナリズムによる記憶の発掘の機能を考察した。アスマンの機能的記憶と蓄積的記憶という分類によって、記憶は発掘されて意味づけがなされているものと、意味づけがなされておらずアーカイブ化されているものとに分けることが可能になった。ジャーナリズムは、「記憶の場」のように国家的記憶を生成するだけでなく、個人の語りや史料から新しい機能的記憶を発掘する機能も有している。ただし、この場合でもジャーナリズムの意味づけによって、蓄積的記憶が持っていた多様性が縮減されることには留意する必要がある。

本稿では、ジャーナリズム実践に焦点を当て、集合的記憶の構築過程を理論的に考察してきた。しかし現代社会では、マス・メディアだけでなくインターネットやSNS(TwitterやFacebookなど)を通じて、集合的な想起が行われている。テネンボイムらの分類(p.44)の(3)でも示されているように、集合的記憶とジャーナリズムの関係は新たな局面に入っており、様々なプラットフォームが整備される中で、その一つ一つに応じた想起の実践がなされていると考えるならば、プラットフォームの違いに焦点を当てた分析も不可欠である。

また、集合的記憶論は伝統、ナショナリズム、民俗、アイデンティティといった重要な概念と結びつけられることで、理論的に発展してきた(粟津 2017: 29-46)¹⁰。その中で、歴史修正主義やフェイク・ニュースなどの問題が噴出し、「過去を書き換える」動きも盛んになっている現状は、示唆に富んでいる。ジャーナリズムが構築する集合的記憶が歴史修正主義などとどういった点で異なるのかを明らかにすることは、規範的にも理論的にも重要な命題であると考えられる。こうしたアクチュアルな現象への対応は、今後の研究課題としたい。

●付記

本研究はJSPS 科研費 JP19J21120 の助成を受けたものである。

●注

1. ホロコーストに代表される第二次世界大戦の記憶は、現在でも世界各地で繰り返し想起され、時に論争を巻き起こしている。つまり、成田の区分は日本に限ったものではない。
2. シュドソンは、のちに論じるアスマンの「文化的記憶」の概念を参照しているわけではない。
3. なお、日本においてはジャーナリズムと集合的記憶を主題として扱った論文はほとんどない。例として、日本の論文検索サイト・Cinii Articles (<https://ci.nii.ac.jp/> 2019年11月27日閲覧)で本文検索を行った結果、「ジャーナリズム 集合的記憶」(0件)、「ジャーナリスト 集合的記憶」(0件)、「journalism collective memory」(2件)、「journalist collective memory」(1件)と計3件ヒットしたのみである。
4. 浜 (2007:5) は、アルヴァックスの「集合的記憶」は想起の側面に着目した概念であることから、これを「集合的想起」と呼ぶことを提案している。
5. 宗教社会学者のベラーは、「記憶の共同体のなかで成長する者は、共同体が経て来た道筋ばかりでなく、その希望と恐れが何なのか、その理想が傑出した男や女のうちにどのように模範を示されているかを聞きながら育っていく」(Bellah 1985=1991:187-188)としている。ジャーナリストも解釈共同体の中で理想的なジャーナリスト像や禁忌を学びながら、専門的なジャーナリストとなっていくと考えられる。
6. 具体的には、ハード・ニュースとソフト・ニュース、ナショナルとインターナショナル、主流報道とタブロイド報道などが挙げられている (Zelizer 2014:41)。
7. 解釈共同体と同様の概念として、山口仁の「ジャーナリズムの世界」を挙げることができる。山口 (2018:70-72) は、「事件報道を通じた現実の構築・構成」に注目が集まる一方、ジャーナリストが「ジャーナリズムとは何か／どうあるべきか」と再帰的に問うことで理想的なジャーナリズム像(「ジャーナリズムの世界」)が構築されることは、これまでのジャーナリズム論では十分に認識されてこなかったとしたうえで、研究の困難性(ジャーナリズム組織の内部で参与観察を行う難しさ)にその原因を求めている。
8. 「メディアが主に政治機構と独立している状態」、「メディア・コンテンツが主にメディア・ロジックによって導かれる状態」がそれ以前の二段階として想定されている (Esser & Strömbäck 2014:8)。
9. 9.11 同時多発テロのような政治的なメディア・イベントは、それぞれの国のマス・メディア組織によって報道されるため、グローバルなフレームや解釈、理解が示されることは少ないとされている (Stepinska 2010:214)。
10. また、『「ニュース」には絶えず歴史家のナラティブが混ぜ込まれてきた』(Theobald 2004:5) という指摘からも分かるように、ジャーナリズムと歴史家の言説の相互作用についても研究課題は残されている。

●参考文献

- Anderson, B. (1983=2007) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Verso. (白石隆・白石さや共訳『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早川)。
- Assmann, A. (1999=2007) *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*. C.H. Beck. (安川晴基訳『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』水声社)。
- Assmann, A. (2010) "The Holocaust – a Global Memory? Extensions and Limits of a New Memory Community" Aleida Assmann & Sebastian Conrad (Eds) *Memory in a Global Age*, Palgrave Macmillan, pp.97-117.
- 粟津賢太 (2017) 『記憶と追悼の宗教社会学：戦没者祭祀の成立と変容』北海道大学出版会。
- Barhurst, K. G. & Mutz, D. (1997) American journalism and the decline of event centered reporting. *Journal of Communication*, Vol.47(4), pp.27-53.
- Berkowitz, D. (2011) "Telling the Unknown through the Familiar: Collective Memory as Journalistic Device in a Changing Media Environment", Neiger, N., Meyers, O. & Zandberg, E. (Eds) *On Media Memory*. Palgrave Macmillan, pp.201-212.
- Bell, E. (2007) "Televising History: The past(s) on the small screen" *European Journal of Cultural Studies*, Vol.10(1), pp.5-12.
- Bellah, R., N. et al. (1985=1991) *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*. University of California Press. (島蘭進, 中村圭史共訳『心の習慣：アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房)。
- Conboy, M. (2012) "How Journalism Uses History" Martin Conboy (Eds) *How Journalism Uses History*. Routledge, pp.1-14.
- Coser, L., A. (1992) "Introduction Maurice Halbwachs 1877-1945" *On Collective Memory*. The University of Chicago Press. pp.1-34.
- Couldry, N. (2012=2018) *Media, Society, World: Social theory and digital media practice*. Polity. (山腰修三監訳『メディア・社会・世界：デジタルメディアと社会理論』慶應義塾大学出版会)。
- Dayan, D. & Katz, E. (1992=1996) *Media Events: The Live Broadcasting of History*. Harvard University Press. (浅見克彦訳『メディア・イベント：歴史をつくるメディア・セレモニー』青弓社)。
- Edy, J. A. (1999) Journalistic uses of collective memory. *Journal of Communication*, Vol. 49(2), pp.71-85.
- Esser, F. & Strömbäck, J. (Eds) (2014) *Mediatization of Politics: Understanding the Transformation of Western Democracies*. Palgrave Macmillan.
- Halbwachs, M. (1950=1989) *La mémoire collective*. P. U. F. (小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社)。
- 浜日出夫 (2000) 「記憶のトポグラフィー」『三田社会学』第5号, 4-16頁。

- 浜日出夫 (2007) 「記憶の社会学・序説」『哲学』117, 1-11 頁。
- Hepp, A. & Couldry, N. (2009) "Introduction: Media events in globalized media culture" Nick Couldry, Andreas Hepp & Friedrich Krotz (Eds) *Media Events in a Global Age*. Routledge, pp.1-20.
- 石田雄 (2000) 『記憶と忘却の政治学：同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店。
- Joanne, G-H. (2011) *Media and Memory*. Edinburgh University Press.
- Kitch, C. (2005) *Page from the past: history and memory in American magazines*. University of North Carolina Press.
- 金瑛 (2010) 「アルヴァックスの集合的記憶論における過去の实在性」『ソシオロギス』34, 25-42 頁。
- Kramer, A-M. (2011) "Mediatizing memory: History, affect and identity in Who Do You Think You Are?" *European Journal of Cultural Studies*. Vol.14(4), pp.428-445.
- 神谷英二 (2016) 「瓦礫の記憶論のために」『福岡県立大学人間社会学部紀要』24(2), 77-90 頁。
- Landsberg, A. (2004) *Prosthetic memory: The Transformation of American Remembrance in the age of mass culture*. Columbia University Press.
- Lang, K. & Lang, E. (1990) "Collective memory and the news" Sidney Kraus (Eds) *Mass Communication and Political Information Processing*. Lawrence Erlbaum Associates, pp.19-35.
- Morris-Suzuki, T. (2005=2004 [2014]) *The past within us: media, memory, history*, Verso. (田代泰子訳『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』岩波現代文庫)。
- 成田龍一 (2010) 『戦争経験』の戦後史：語られた体験／証言／記憶』岩波書店。
- Neiger, N., Meyers, O. & Zandberg, E. (Eds) (2011) *On Media Memory: Collective Memory in a New Media Age*. Palgrave Macmillan.
- Nora, P. (1984=2002) "Entre mémoire et histoire: la problématique des lieux" Pierre Nora (Eds) *Les lieux de mémoire I: La République*. Gallimard. pp.xii-xxiv. (長井伸仁訳「記憶と歴史のはざまに」『記憶の場：フランス国民意識の文化＝社会史1 対立』岩波書店, 29-56 頁)。
- 大石裕 (2005) 『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房。
- Olick, J., K., Vinitzky-Seroussi V. & Levy, D. (Eds) (2011) *The Collective Memory Reader*. Oxford University Press.
- Olick, J., K. (2014) "Reflections on the Underdeveloped Relations between Journalism and Memory Studies" Barbie Zelizer & Keren Tenenboim-Weiblat (Eds) *Journalism and Memory*. Palgrave Macmillan, pp.17-31.
- Schudson, M. (2014) "Journalism and Non-Commemorative Cultural Memory" Barbie Zelizer & Keren Tenenboim-Weiblat (Eds) *Journalism and Memory*. Palgrave Macmillan, pp.85-96.
- Stepinska, A. (2010) "9/11 and the Transformation of Globalized Media Events" Nick Couldry, Andreas Hepp & Friedrich Krotz (Eds) *Media Events in a Global Age*. Routledge, pp.203-216.
- Tenenboim-Weinblatt, K. & Neiger, M. (2019) "Journalism and Memory" Karin Wahl-Jourgensen & Thomas Hanitzsch. (Eds) *The Handbook of Journalism Studies*. Routledge, pp.420-434.
- Theobald, J. (2004) *The Media and the Making of History*. Routledge.
- Tuchman, G. (1978=1991) *Making News*. The Free Press. (鶴木眞・櫻内篤子訳『ニュース社会学』三嶺書房)。
- 山口仁 (2018) 『メディアがつくる現実, メディアをめぐる現実：ジャーナリズムと社会問題の構築』勁草書房。
- 安川晴基 (2008) 「『記憶』と『歴史』：集合的記憶論における一つのトポス」『藝文研究』94, 282-299 頁。
- Zelizer, B. (1992) *Covering the Body: The Kennedy Assassination, the Media, and the Shaping of Collective Memory*. The University of Chicago Press.
- Zelizer, B. (2014) "Memory as Foreground, Journalism as Background" Barbie Zelizer & Keren Tenenboim-Weiblat (Eds) *Journalism and Memory*. Palgrave Macmillan, pp.32-49.

佐藤信吾 (慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程, 学術振興会特別研究員)